

水仙に雨のひらがな降る日かな

藤田湘子

句集『前夜』所収。教えられるまでほとんど気にも止めていなかつた句である。しかし、「雨のひらがな降る日」とは、なんと叙情的な表現だろう。

藤田湘子の詩心の根幹には、振り払えど振り払えどこの叙情性が纏わり付いて、一見女性が詠んだ句ではないかと錯覚させられることもある。普段は大胆な男ぶりが強く出ていたが、心底は實に纖細であつた。

「平仮名」と言えば紀貫之の『土佐日記』の冒頭、「をとこもすなるにきといふものを、をむなもしてみむとてするなり」が思い出される。土佐で失つた幼女への貫之の想いと、水仙に降る雨がどこか似ている。

早梅やひらがなの名の吾子ふたり

湘子

1990年(h2作)第九句集『前夜』鑑賞・轍郁摩